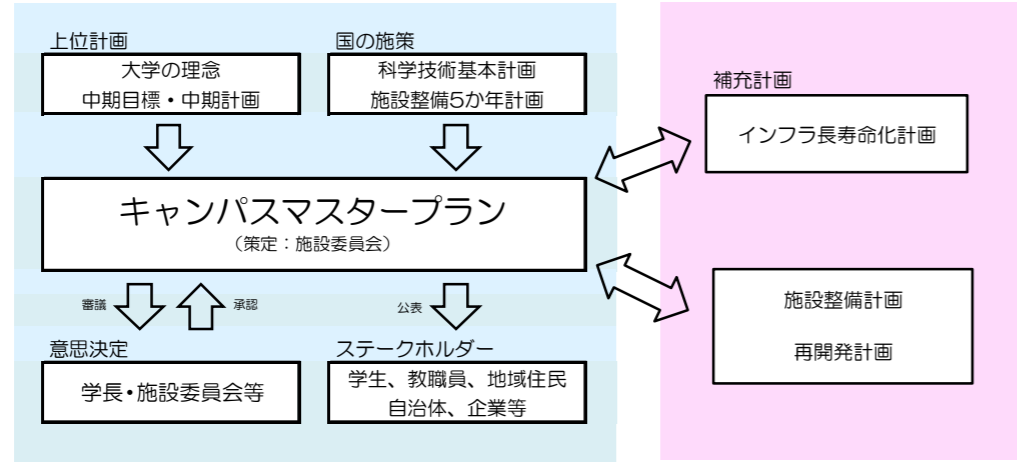




この「京都工芸繊維大学キャンパスマスタープラン2025（以下、「本プラン」という。）」は本学の歴史・伝統を継承しながら、将来を見据えた戦略的なキャンパス整備・運用を行うための指針として、①大学の戦略や構想を施設の側面から支援していくこと、②キャンパスの将来像について、学内外の関係者が共通認識を持てること、③イノベーション・ commonsの推進に寄与すること、④キャンパス整備の必要性・緊急性をわかりやすく提示すること、⑤中長期的な改修計画を立案し実施することに資するものとして策定し、今後の大学の方針、国の施策、教育研究等の変化に応じて適宜見直しを実施するものとする。

キャンパスマスタープランの位置付け



キャンパスの基本方針

〈基本方針1〉教育・研究環境の充実

学修者を中心に捉えたアクティブラーニングに対応した教室や個人・少人数で集中して学修するための commonsスペース等学修環境の整備、高度で専門的な教育に対応した実験・実習環境等の整備、また、研究力強化のためのプロジェクト研究環境の整備等を計画的・重点的に推進する。

また、各教育研究分野が使用できるスペースについて、良好な研究環境を提供できるよう適切なスペース配分を推進する。

〈基本方針2〉社会との共創

国内外の優秀な研究者・学生を確保できる環境や設備を整備し、知的資産が集積する拠点を構築するとともに、多様な研究者や異分野、地域・産業界等多様なステークホルダーとの「共創」を促進する拠点「イノベーション・commons（共創拠点）」へとキャンパス全体を転換し、地域社会への貢献と、国際的な発信力を有する開かれたキャンパスづくりを計画的に推進する。

また、激甚化する災害へ備える地域の防災拠点として、耐災害性・防災機能を強化したキャンパスづくりを推進する。

〈基本方針3〉地球環境への貢献

大学の理念に基づき、環境安全に関する教育研究を積極的に推進し、現代社会が直面する環境課題を認識し解決する能力を備えた人材の育成と、SDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けた科学技術イノベーションを通じて、持続可能な社会の構築に貢献する。

そのために、環境安全マネジメントシステムの運用を通じ、大学活動において環境との調和と共生を図りながら、環境に配慮した施設・設備の整備を推進して、環境負荷の低減と環境保全に努める。

〈基本方針4〉持続可能なキャンパス環境の保全

日常的に適切な点検・維持管理をおこないつつ、インフラ長寿命化計画に基づいた大規模改修・性能維持改修を実施することで、施設・設備の長寿命化を図るとともに、施設のライフサイクルコストの低減・維持管理費の平準化に努める。さらにキャンパスの持続可能性を見据え、将来的な建替え等も考慮した施設のトリアージや土地の有効活用を促進する。

また、誰もが使いやすく心地よく過ごすことのできるキャンパスづくりを目指し、ユニバーサルデザインや屋外環境アメニティの整備充実をはかり、併せて安全を第一とした交通環境、セキュリティが保たれた安心な施設環境の整備をおこなう。

教育・研究環境の充実—戦略的な施設マネジメントの推進と施設マネジメント体制・施設の有効活用

【スペース配分の基本方針】（抜粋）

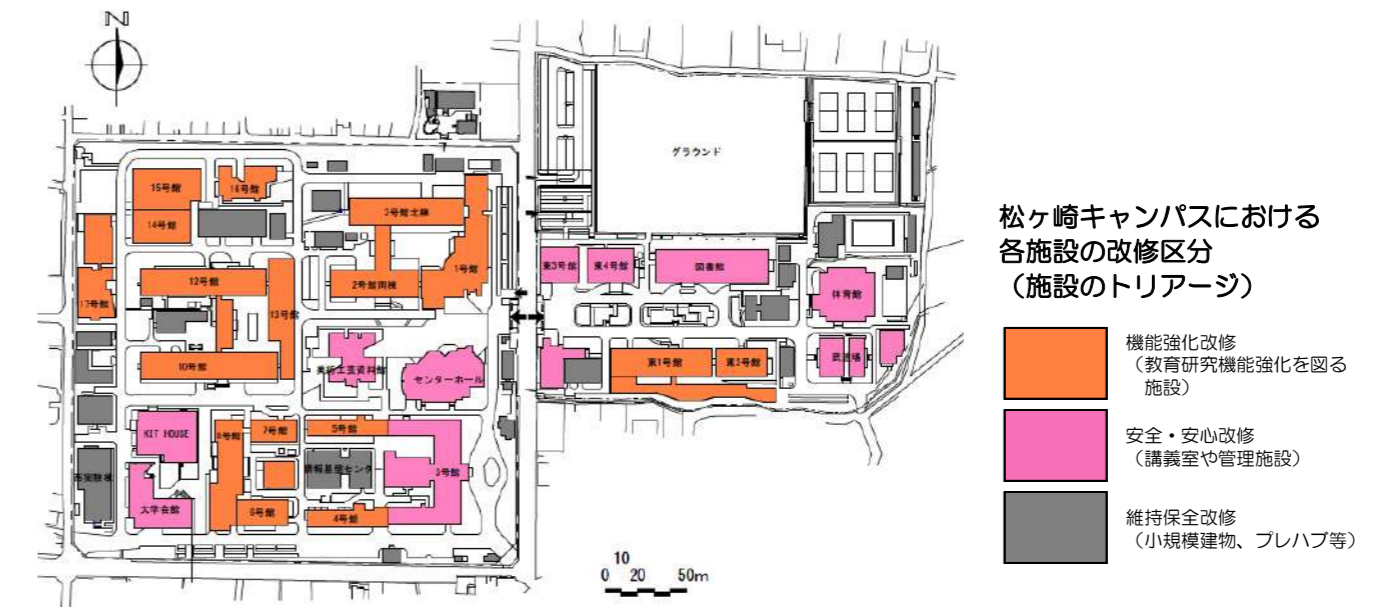
講義室等を除く学域等の各教育研究分野が使用出来るスペースについて、配分の基本方針を定めるものとする。松ヶ崎キャンパスにおける学生の教育研究（教育上の研究も含む）に必要なスペース配分は、現状をベースに学生1人当たりの面積が平等になるよう、基本的に、学生収容定員に応じた配分とする。そこには、その教育分野に関係する教員のスペース等も含むこととする。

【スペースチャージ制度の運用・スペースの再配分】

スペースチャージ制度は施設の適切な維持管理、限られた面積の有効活用を目的として、各組織が施設を利用する面積に応じて負担する制度として2022年度より導入され、経過措置を経て2026年度より規定のとおり1,500円/㎡増額し、遊休スペースの返却を促すものである。返却されたスペースは、共通的目的に利用する他、学域間スペースの不均衡に鑑み、定員に基づく配分割合に対して面積が不足する学域に限って新たに返却スペースの再配分をおこなうこととする。

教育・研究環境の充実—耐災害性と機能強化/保有面積の適正化

概ね経年40年を超える老朽化・陳腐化した施設は大規模改修の対象となる。戦略的リノベーションや性能維持改修による老朽改善を基本とした耐災害性と機能強化によって、安全・安心で質の高い教育環境を確保する。なお、戦略的リノベーションによる耐災害性と機能強化が困難な施設については改築も含めた検討を行っていく。長期的な施設の維持保全を行っていく上では保有面積の総量最適化の取組が必要である。そのためには重点的な整備の観点が必要であり、長期的に必要な施設と将来的に不要となる施設を峻別し施設整備を行っていく。



社会との共創—イノベーション・commons（共創拠点）の実現

教育研究施設の個別の空間だけでなく、食堂や寮、屋外空間等も含め、キャンパス全体が有機的に連携し、あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレーヤーが共創できる拠点を、「イノベーション・commons」（共創拠点）とし、計画的・重点的な施設整備を進めることとする。

社会との共創—地域を中心とした人材育成やグローバル化に対応した環境整備

国際競争が激化する中で、大学の価値を高めるべく、人材、場、カリキュラムの魅力化を掲げてグローバル化を推進している。キャンパス全体を国際的な共創拠点「イノベーション・commons」へと転換するため、施設整備により国内外の優秀な人材を確保できる環境を整備し、地域社会への貢献と、国際的な発信力を有する開かれたキャンパスづくりを計画的に推進する。

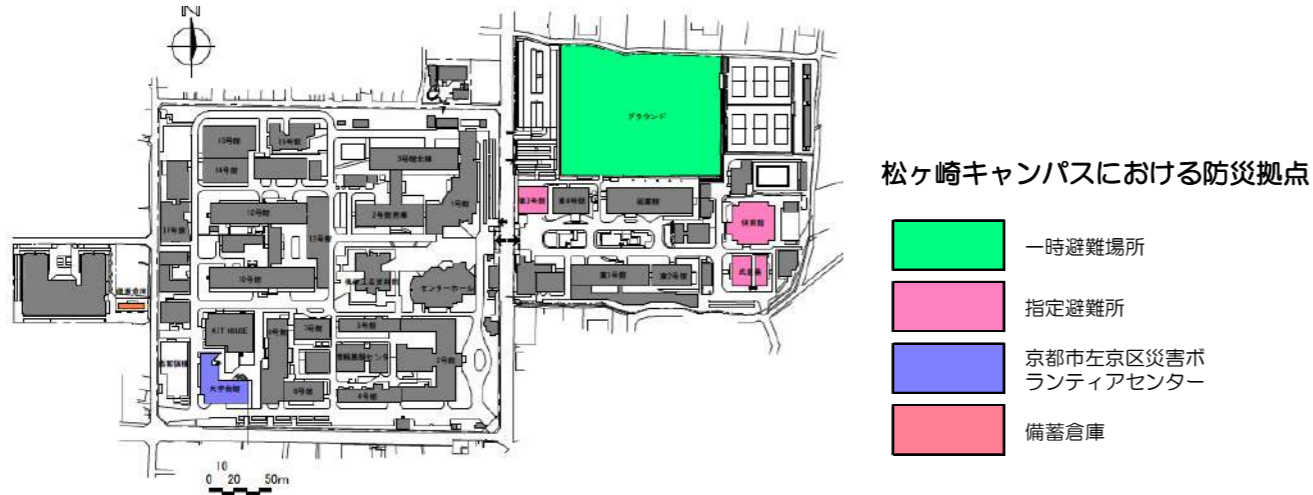
社会との共創—産業界等とも協働した共創を図る環境整備

共同利用スペースは、主に外部資金等を導入したプロジェクト研究や、その他の既存の組織の枠を超えた教育研究を対象に応募を募り、施設委員会の調査審議を経て、利用料金その他の費用を負担させた上、期限を付して利用を許可している。現在共同利用スペースは、13、15、17号館および東4号館に確保しており、今後も状況に応じて返還スペースの転用等を検討し、整備していく予定である。



社会との共創—防災拠点としてのキャンパス

近年の気候変動の影響により激甚化・頻発化する気象災害や、発生が切迫している南海トラフ地震など、大規模自然災害への対策が喫緊の課題となっている。大規模災害が発生した場合には、松ヶ崎キャンパスにおいては、グラウンドを一時避難場所、東3号館、体育館、武道場を指定避難所として京都市から指定を受けている。学生会館は、京都市左京区災害ボランティアセンターの活動拠点として京都市左京区と協定を結んでいる。また、嵯峨キャンパス構内は広域避難場所として京都市から指定を受けている。



地球環境への貢献—CO2削減に向けたロードマップ

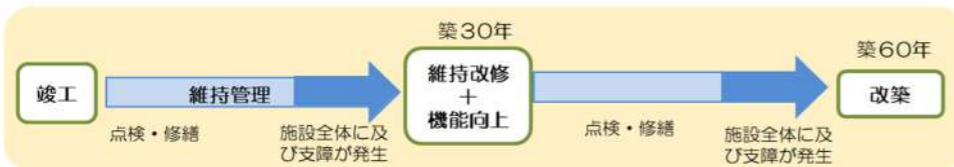
我が国の温室効果ガス削減目標については、「地球温暖化対策計画」（2021年10月22日閣議決定）における中期目標として、2030年度において温室効果ガスを2013年度から全体で46%削減することを目指すこととしており、国立大学法人等は、大学等の建築物が含まれる「業務その他部門」に分類され、51%の削減率が求められている。本学についてもこれに向けて省エネ等の取り組みを進めている。既に照明のLED化については90%以上完了しており、今後もガス式空調を高効率の電気式空調に改修、建物の高断熱化等省エネ改修を計画している。

ハード的な対策だけでは達成が出来ないため、今後は夜間・休日等の不在時に不要となっているエネルギー使用を減らす運用等のソフト的な取り組みも併せて進め、可能な限り目標値に近づける努力を行っていく。

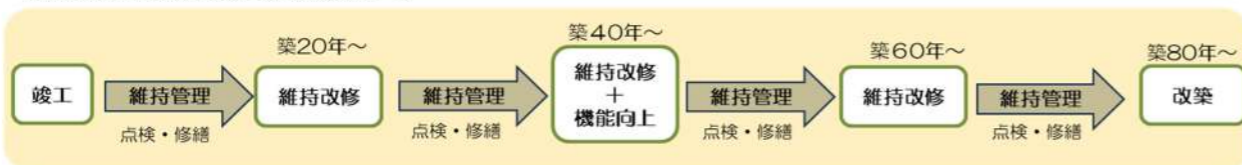
持続可能なキャンパス環境の保全—インフラ長寿命化計画

我が国の学校施設は、1965年代後半から1970年代にかけて整備された施設が一齐に更新時期を迎えており、本学も同様の状態である。これらの施設を点検により劣化、損傷等の老朽化の状況を的確に把握した上で、優先順位付けや予算の平準化、トータルコストの縮減等を加味した計画を策定し、効果的・効率的に長寿命化を図ることにより、良好な状態の維持や安全性の確保に努めていく必要がある。施設の性能維持、長寿命化を図るうえで、「インフラ長寿命化計画」を策定し、経年40年程度を目安とする国からの施設整備費補助金による大規模改修と、経年15年～20年の施設を対象とした、自己財源等による外壁、防水、空調、照明等整備の性能維持改修を合わせた、効率的なインフラ整備を行っていく。

従来の基本的なライフサイクルのイメージ

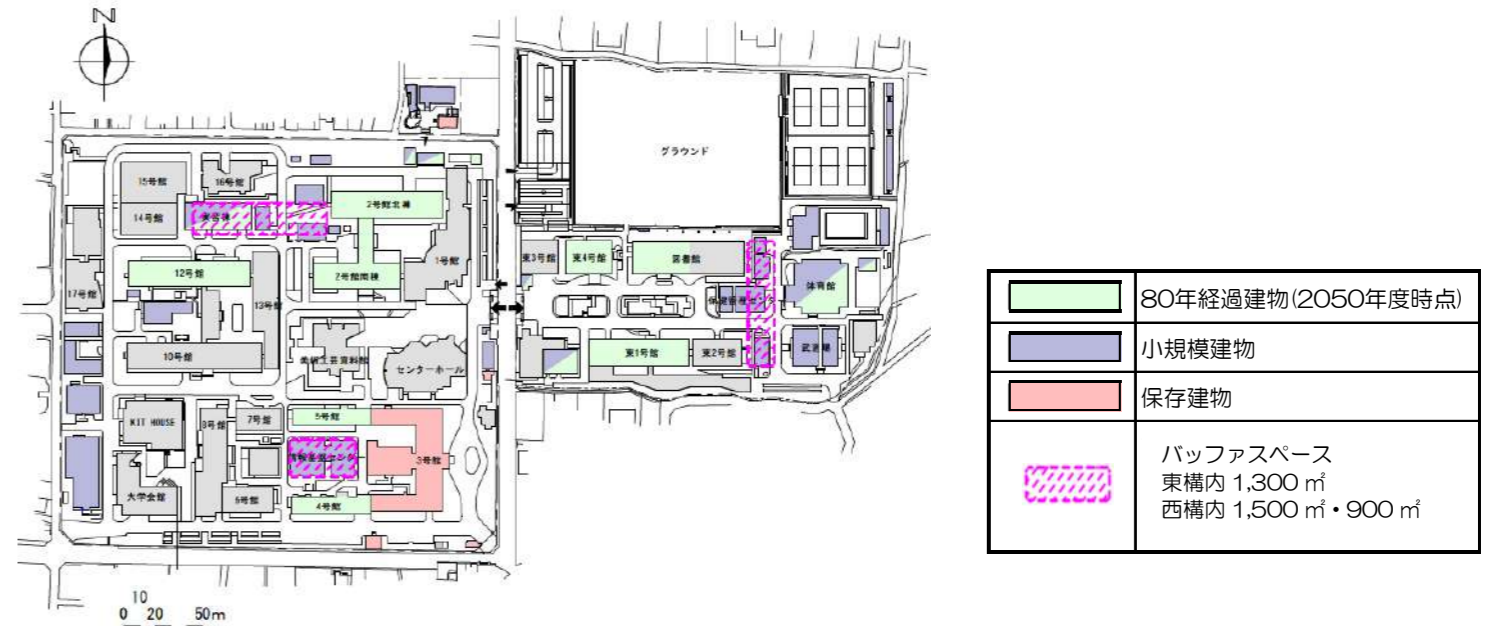


長寿命化に向けた基本的なライフサイクルのイメージ



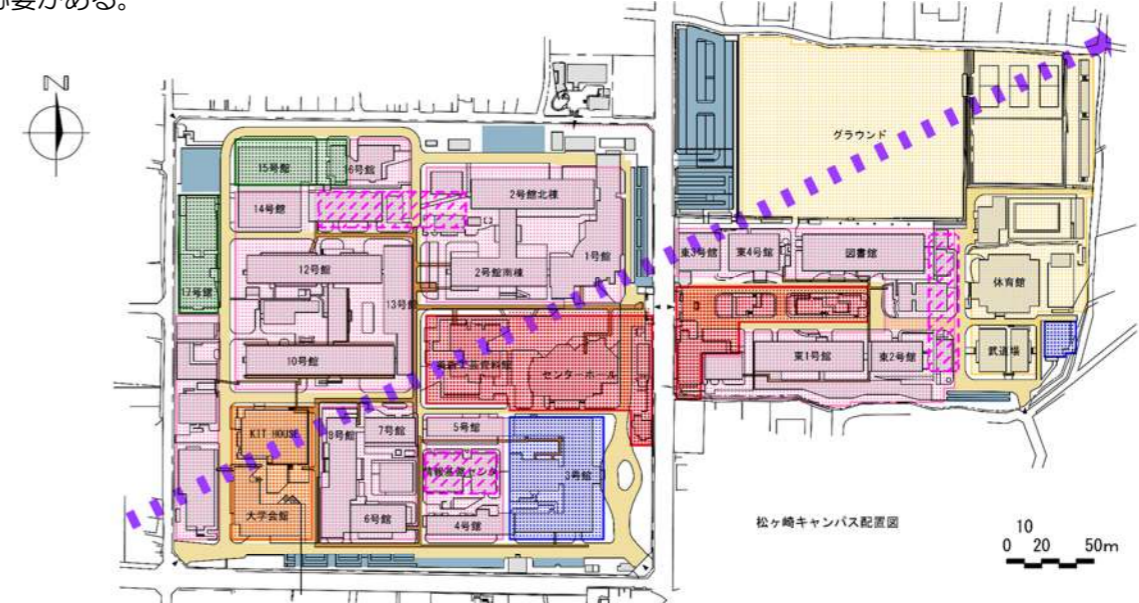
持続可能なキャンパス環境の保全—持続可能なキャンパスの形成に向けて

長寿命化に向けたライフサイクルのイメージでは築80年を目途に建替えを視野に入れるが、本学では、2050年には2号館を始め経年80年以上の建物がキャンパス全体の4割近くにのぼる。キャンパスの再開発に当たっては、先行して延面積5,000~7,000㎡程度の新棟を建設するための900㎡~1,500㎡のバッファスペース（空地）が必要となる。しかし松ヶ崎キャンパスには現在まとまった空地が無いため低層建物が配置されているエリアを計画地とし、東構内に1か所（約1,300㎡）、西構内に2か所（約1,500㎡、900㎡）を設定し、不規則な建設により建てづまりが生じないようにコントロールしつつ計画的な再開発を検討していく。



松ヶ崎キャンパスのゾーニング計画

ゾーニングは、4つのカテゴリーの「教育・研究ゾーン」と「管理・共通ゾーン」、「産学・地域連携ゾーン」、「福利厚生ゾーン」、「運動・課外活動ゾーン」、美術工芸資料館及び附属図書館と東西の広場からなる「中央交流ゾーン」及び「駐車・駐輪ゾーン」の7ゾーンとしている。今後の施設整備に際してもこのゾーニング計画を念頭に計画を行う必要がある。



	中央交流ゾーン		福利厚生ゾーン		松ヶ崎キャンパスの基本軸
	教育・研究ゾーン		運動・課外活動ゾーン		バッファスペース
	産学・地域連携ゾーン		学生支援施設		構内主要導線
	管理・共通ゾーン		駐車・駐輪ゾーン		共同溝
					キャンパス出入口